

第6回生物学者のための疫学研修会

広島疫学部 副主任研究員 坂田 律

放射線影響研究機関協議会^注主催の「第6回生物学者のための疫学研修会」が8月24日と25日に開催され、49人（うち放影研内6人）の方にご参加いただきました。これまで講堂を使っていたのが、今年は初の比治山ホールでの開催となり、講堂からテーブルなどを移動させなければならず、たくさんの疫学部職員にお手伝いいただきました。このような力仕事ではいつものことながら、職員の高齢化を痛切に感じました。

1日目は、まず「専門でない人のための疫学」（坂田 律）と題して疫学の用語・研究方法の解説をした後、「原爆被爆者寿命調査の最近の結果」（小笹晃太郎疫学部長）で放影研の疫学研究結果を説明し、「CTスキャンによる小児がんリスク」（定金敦子広島疫学部副主任研究員）で疫学論文の読み方や理解する上での注意点を解説。続く「放射線被ばくと甲状腺がん」（今泉美彩長崎臨床研究部放射線科長兼臨床検査科長）では、甲状腺の説明から放射線影響までを含んだ解説をしていただきました。その後の「胎児への被ばく影響」（中村 典遺伝学部顧問）、「閉経後乳がんへの放射線被ばくとエストラジオールのJoint effect」（Eric J. Grant 広島疫学部副部長）は、疫学と生物学の両方の研究結果を交えた内容で参加者の興味を引いたようです。初日最後のセッションは「ICRP 組織幹細胞報告書の要約」（丹羽太貫理事長）で、出席者の中にはこの講義を目的に参加された方も多かったようで、みなさん熱心に聴いておられました。その内容を受け「幹細胞競合による線量率効果のシミュレーション」（吉田和生 電力中央研究所 放射線安全研究センター長）で生物学と疫学をつなぐようなモデル検討の話をしていただ

き、1日目を終了しました。

例年ほとんどの方にご参加いただいている懇親会は、Robert L. Ullrich 副理事長、児玉和紀主席研究員のあいさつから始まり、交流を深めました。

2日目は、終了予定のお昼頃に台風が広島に最接近するとの予報を受け、交通機関の運転中止が予想された九州からの参加者を中心に、残念ながら予定を切り上げてお帰りになる方もおられましたが、大半の方が雨の中、最後までご参加くださいました。「マウス実験を疫学的にみてる」（中村顧問）という、まさに疫学と生物学の橋渡しの発表の後、過剰相対リスクなどを計算するRの拡張パッケージ開発についての「動物実験データで疫学の指標は出せるのか？」（土居主尚 放射線医学総合研究所 研究員）では、参加者から「ぜひ使わせてもらいたい」との声が上がっていました。最後のTomasettiらの「Variation in cancer risk among tissues can be explained by the number of stem cell divisions」を題材とした総合討論では、今までのようにひとつひとつの遺伝子に言及せず、変異の数の変化に着目した研究内容の解説を聴き、理解することで手一杯という方が大半だったように思います。

台風接近のため参加者の方のお帰りが心配でしたが、幸い上りの新幹線は問題なく動き、東からお越しの方はほぼ予定通りにお帰りになられたようで安心しました。

今回は、前回までのプログラムに比べ放影研の研究紹介を短くし、疫学研究と生物学的研究の橋渡しとなるような内容を増やしたことや、電力中央研究所、放射線医学総合研究所より一題ずつ話題を提供していただいたことが新しい試みでした。最後のアンケートでは、来年の



広島研究所の比治山ホールで開催された第6回生物学者のための疫学研修会

話題を提供すると予告していただくことができ、次回へとつながる会となったことは嬉しい限りです。また、「数年前に参加したが、忘れていることが多く勉強になった」との声も聞かれ、続けていくことの重要性も感じました。第4回にあった「専門でない人のための放射線生物学」を復活してほしいという声も強く、次回のプログラムに盛り込みたいと思います。

雨の上がった翌日、比治山ホールからの撤収時には、所内停電でエレベーターが止まるというアクシデントもあり、予想外のことが多かった今回の研修会でしたが、開催の意義を感じながら終了を迎えることができました。ご参加いただいた方々、講義を担当してくださった方々、そして運営をお手伝いいただいた総務課と疫学部の方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。

注) 放射線研究機関の相互理解と連携を深めることを目的に、環境科学技術研究所、京都大学、長崎大学、弘前大学、広島大学、福島県立医科大学、放射線医学総合研究所、放影研（50音順）により構成された機関。